



# であい

公益社団法人  
北海道国際交流・協力総合センター  
HIECC/ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

## 北海道災害支援多言語サポーター オンライン研修会を実施

道内で大規模な自然災害等が発生した際に、被災した在住外国人等を支援する目的で、平成 23 年度に設置された「北海道災害支援多言語サポーター」制度に登録しているサポーターを対象に、2 月 28 日と 3 月 13 日にオンライン研修会を実施。両日とも、一般財団法人ダイバーシティ研究所の田村太郎氏を講師に迎え、講演と参加者によるグループワークの 2 部構成で実施した。

講演では「災害時の外国人支援～コロナ禍における配慮事項をふまえて～」と題し、阪神・淡路や東日本大震災、また西日本豪雨被害で実際にあった例を示し、災害時における外国人特有の困りごとなどについて具体的なケースを交えてのお話があった。特に、発災後に避難所等で不安な状況下にある在住外国人に接するとき、多言語対応できるサポーターが「周囲の日本人と繋いでくれる」という安心感を提供することの重要性について触れると、参加者は画面越しで頷きながら共感していた。

その後、グループに分かれ、災害発生時のケーススタディを実施。講師から提示された 10 の事例は、過去の災害において、実際に外国人から寄せられた困りごと。各グループ

間で一つ一つにどのように対応したらいいか積極的に意見を出し合い、丁寧な話し合いがなされていた。参加者からは、「外国の方に限らず、安心を基本に置いた情報提供の重要性について考えさせられる良い機会となりました」と感想があった。

サポーターを対象とした研修会としてはオンラインでの開催は初めてだったが、札幌のみならず釧路や旭川など道内各地の登録者が参加でき、参加者のみならず運営側にもオンラインの利便性や有用性を実感する機会となった。ハイエックとしては、サポーターの活動にプラスとなる研修の充実を引き続き図っていきたい。



講師(画面右)とオンラインで意見交換を行うサポーター

11 月 7 日(土)～8 日(日)一泊二日の日程で、ハイエック(以下、HIECC)主催・引率のもと北海道内の大学などで学ぶ留学生等 22 名(19 カ国・地域)が白老町と洞爺湖町を訪れた。

1 日目は札幌からバスで約 1 時間半の白老町を訪れた。現地では、アイヌ文様刺繍を教えてください「みんなの心をつなげる『巨大パッチワークの会』」の方々、盛大な拍手で迎えてくれた。留学生たちは初体験となるアイヌ文様刺繍の作業中、言葉の壁を越え、講師の方と文様の意味などについて話を弾ませ、交流を深めた。

次は、町内の「ウポポイ(民族共生象徴空間)」に向かい、国立アイヌ民族博物館や、アイヌ古式舞踊の体験施設で、固有の文化の多彩な魅力に触れた。

2 日目は、有珠山の火山活動で知られる洞爺湖町へ足を延ばした。午前中は、洞爺湖ビジターセンター内にある火山科学館を訪問し、有珠山の歴史や噴火のメカニズムを映像や展示で学んだ。身近に火山がない出身国の留学生も多く、真剣に展示や映像を視聴していた。

午後は、噴火の記憶や災害を軽減する知恵を伝える地域住民の会「洞爺湖有珠山マイスターネットワーク」のガイドの案内で、西山山麓火口散策路を見学。美しい景観の中に垣間見える 20 年前の噴火の被害を目にして、自然災害と共生する町の歴史を知った。

留学生からは、「北海道の素晴らしい自然や、文化を知る貴重な体験となりました」と好意的な意見が寄せられ、白老町民の方からは「留学生が白老に興味を持ってくれることで、地域の魅力を再認識することができました」という感想も聞かれた。

今後も、多様な文化が共生できる社会の実現に向けて、外国人と道内各地域の相互理解を促進する機会を創出し、地域の国際化に貢献していきたい。



アイヌ文様刺繍を手に笑顔の留学生(写真中央の 4 名)

## 留学生ふれあい 交流 in いぶり

(11 月 7 日～8 日)



## 済州国際青少年フォーラム

### 報告会を開催

(3月21日 札幌)



北海道と友好協力を締結している大韓民国・済州特別自治道にて国際的な視野を持つ未来のグローバルリーダーとなる青少年のネットワークづくりを目的とした「済州国際青少年フォーラム(以下、フォーラム)」が昨年11月27日～29日にオンラインで開催され、道内の高校から選抜された4名が参加した。この日は、かでの2.7(札幌市中央区)で行われた道民向け報告会で、事業に参加した高校生がフォーラムでの経験を発表した。

第11回目のフォーラムは今までの形式と異なり、世界各国で影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症により、初のオンラインでの開催となり、9カ国・22地域から151名の高校生が参加した。

「急速に変化する世界における青少年リーダーの誓い」をフォーラムの全体テーマに、コロナ禍での教育や気候変動、公衆衛生、また若者の社会参画の4つの小テーマに分かれて、2日間にわたりグループディスカッションが行われた。高校生はフォーラムの公用語である英語とオンラインツールを駆使しながら参加した。報告会では、済州島やフォーラムの概要、オンラインツールのプラス面とマイナス面、また、それぞれが参加する前と後で感じた自身の変化などについて語った。

「新型コロナウイルスに対する考え方が変わりました」と語った伊藤なつみさん(登別明日中等教育学校 5年)。フォーラム参加前は、「マスクが息苦しい、学校行事やイベントが全て中止になって残念」と悪い面ばかりを見ていたが、ディスカッションでハワイの高校生の「観光客が来なくなりビーチがきれいになるなど、地域における環境面での改善がみられた」との意見を聞き、「新型コロナの良い面に気付けるようになり、それが収穫でした」と視点の広がりを感じた。

報告会の参加者からは、「オンラインでのフォーラムであっても、参加した高校生が多くの学びを得ることができたことがわかりました。難しいテーマを高校生の視点から考え、私自身もとても勉強になりました」という感想が寄せられた。

事前及び事後研修も全てオンラインで行われ、報告会で初めて顔を合わせた4人。画面上で知り合ってから半年後にやっと仲間に会うことができ、「人と会える」喜びを分かちあっていた。「オンライン」と「オフライン」のメリット・デメリットを十分に痛感したこと、この経験がこれからの新しい時代を生き抜いていくのに活用されていくのだろう。



フォーラムで得た学びや気づきを語る高校生

## 「多文化共生アワード 2020」表彰式を釧路で開催



「北海道多文化共生アワード」は、北海道在住の外国人と道民がともに地域の一員として地域の発展や活性化に貢献する多文化共生社会の実現を目指す事業として、人材育成や防災、教育、地域づくりなどのさまざまな分野において、顕著な功績が認められる団体を顕彰する事業として平成28年度から実施されている事業。

今年度の「北海道多文化共生アワード」に輝いた釧路国際交流会(横山博子代表)の表彰式が、3月18日(木)に釧路プリンスホテルで行われた。

当センターの越前副会長兼専務理事より同会に表彰状や記念の盾が授与されると、場内は温かい拍手に包まれた。横山会長からは「会を設立して25年目という節目の年に受賞できたことに大きな意味を感じます。これからも釧路管内にいらっしゃる外国人を温かくおもてなしする気持ちで活動し、釧路の国際化に励んでいきたいです」と謝辞があった。

なお、例年は、北海道知事や札幌市長並びに外国公館の方々が列席する札幌市内で行われる新年交礼会の中で表彰式を行っていたが、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響から、初めての地元での式となった。地元開催なので、同会関係者の方が多数出席し、新聞の取材もあり、注目度も高く関係者の皆さまが一堂に喜びを分かち合える式典となった。

今回の受賞が、北海道における多文化共生社会の一層の推進に寄与し、道内で活動する他の団体の励みになることが期待される式となった。



(上)謝辞を述べられる釧路国際交流会の横山会長  
(下)受賞の喜びにわく釧路国際交流会のメンバー

## 第 43 回サッポロ・インターナショナルナイト (3月14日 札幌市)



北海道青少年科学文化財団が主催し、当センターが共催する「第 43 回サッポロ・インターナショナルナイト」が 3 月 12 日行われ、「若者よ、世界へ！」のテーマの下、道内で学ぶ 15 カ国・地域の留学生と札幌圏 12 校の高校生 80 人が参加した。なお、本来は例年通り 12 月の開催が予定されていたが、コロナ禍でこの日まで延期され、規模も 3 分の 1 に縮小され、さらに、従来のディスカッション形式ではなく、発表方式での運営へ変更しての開催となった。

第 1 部は、「アジア・オセアニア」、「ヨーロッパ・アフリカ」、「北米・中南米」の 3 つの部屋に分かれて、留学生が、自国の歴史や文化、自然や社会、教育事情等について話した。各部屋に参加していた高校生は、着席しながら長時間発表を聞いていたが、発表の中で留学生が話すトピックに驚き且つ関心を示しながら、最後まで積極的な姿勢で耳を傾けていた。質疑応答では、英語で質問する姿も見られた。

第 2 部の全大会では、高校生 2 名と留学生 1 名が司会

を務め、3グループの代表による報告があり、それぞれの部屋で話し合われたことを全体で共有した。最後に、札幌ユネスコ協会会長・(株)アークス取締役社長の横山清氏より来賓の挨拶があり、「ウイズコロナ、そしてアフターコロナに新しい時代が必ずやって来る。ここに集った優秀な学生の皆さんが、新しい世界に変えていき、その力を持っている印象を受けました」と、参加した学生たちに励ましの言葉を贈った。



第 2 部の全大会では 3 グループより分科会の内容報告があった

## 令和 2 年度北海道出身海外移住者子弟留学生 北海道海外技術研修員 修了式



関係者に感謝の気持ちをスピーチで伝える

令和 2 年度ハイエック受入の北海道海外移住者子弟留学生(以下、留学生)の中野ガブリエル寿則さんと北海道海外技術研修員(以下、研修員)の鶴めぐみさんは、新型コロナウイルス感染拡大の影響による入国遅延により、留学生は 6 月に、研修員は 9 月に来道。例年より短い研究・研修期間となったが、3 月 19 日に札幌市内のホテルで行われた修了式で、全てのプログラムを終えた。

留学生の中野さんは、北海学園大学工学部で「日本の IoT 技術」を学ぶために留学し、主にドローン GPS 機能を PC で制御するシステムについて学んだ。鶴さんは、「人口知能(AI)システムを活用したソフトウェア開発」の研修を終えた。来道当初は日本語で専門分野の研究に少なからず不安を覚えていたが、懸命に学ぶ二人を指導してくださった方々が、最後まで優しく支えてくださり、限られた条件の中において、大きな成果を残すことができた。さらに、自身のルーツである北海道の文化や自然、生活に触れたことで、北海道での滞在を充実した清々しい気持ち

で終えられた。直前まで悩み考えた原稿を手にとり二人がスピーチをすると、今までの労苦と成功を称え参列者から大きな拍手が送られていた。

修了式には留学生と研修員に親身になって指導してくださった受入機関の方々、北海道総合政策部国際局の工藤国際局長、南米圏交流団体を代表して(一社)北海道日伯協会の道下会長、また来道当初に日本語の指導を担われた日本語講師の方々、またハイエックから越前副会長兼専務理事はじめ職員が出席し、晴れの日を迎えた二人を温かく見守った。



受入機関やお世話になった皆さまと記念の一枚